発刊によせて

本年度は次年度に迎える本学創立一二〇周年の佳節に向けて、更なる飛躍の基盤を確立する一年であったように思う。世界は引き続くコロナ禍に加えて、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻という緊迫した事態に直面することになった。そうした世相を物語るように、二〇二二年に選ばれた今年の漢字は「戦」であった。令和の時代はコロナ禍と大国同士の軍事衝突という人類の存亡を左右する戦いの中で幕を開けたと、後世の歴史学者によって総括されるのではないだろうか。こうした世の乱れを眼前にして、我々はただ悲観し、立ち尽くすわけにはいかない。いつの世も偉大な哲学や思想は乱世の中で育まれる。つまり、希望を求める人類の希求に呼応して、民衆の大地から正義の言論は確立されるのである。

当研究所は現代社会が抱える諸課題に寄与することを目的に、多角的な研究活動を推進している。そうした研究所の原点に立ち返り、更なる社会貢献、地域貢献に挑戦していきたい。当紀要は号を重ねるごとに学際的な色彩を強めてきたが、本号では森田実名誉学長による「平和憲法講義」、また日中関係の専門家である西園寺一晃先生による「池田大作先生と日中友好の歴史」という特別講義を掲載している。国際情勢が不安定化しつつある今こそ、もう一度、日本が歩んできた戦後史を振り返る必要があるのではないだろうか。戦後史を総括する上で、日本国憲法と民間外交が果たしてきた役割を改めて再認識する必要があるだろう。そうした問題意識に基づいて、読者には森田実名誉学長と西園寺一晃先生の特別講義を読んでいただければと思う。

また本年度は現代儒学研究部門、現代仏教研究部門、西洋哲学研究部門、イスラーム研究部門、池田大作思想研究部門の五研究部門体制をより充実させ、三つの極を形成しながら研究・教育活動を行ってきた。一つの極は現代

儒学研究部門が長年続けている論語素読教室である。コロナ禍において開催が危ぶまれる時期もあったが、感染症対策を徹底した上でほぼコロナ禍前の状況を取り戻すことが出来た。また昨年度、当研究所に設立された仏教者で創価大学の創立者である池田大作先生を研究対象とする池田大作思想研究部門と現代仏教研究部門の合同により、本年度、新たに池田大作思想研究会が発足した。池田大作思想研究会では毎月一回公開講座を開催し、本号に掲載した西園寺一晃先生の特別講義も池田大作思想研究会による研究活動の一環で行われたものである。加えて、西洋哲学研究部門とイスラーム研究部門も部門合同による西洋哲学・イスラーム研究部門合同研究会を三ヵ年計画で開催予定である。このように、儒学、仏教・池田大作思想、西洋哲学・イスラームという三つの極を軸に、本年度はより社会に開かれた活動を行うことが出来たように思う。

来年度、当研究所では大きなシンポジウムの開催を予定している。本年度はそのための確かな土台を築くことが出来た。そしてこれからも変化を恐れず挑戦をし続けたい。古代ギリシャの哲学者、ヘラクレイトスは「万物は流転する」という言葉を残している。私は一歩踏み込んで、人間の心は万物を良い方向に変化させる力を持っていると訴えたい。その心の基盤となる哲学・思想の探求と深化を目指し、明年も精進していく所存である。

令和五年二月

東日本国際大学
東洋思想研究所所長
松　岡　幹　夫